

## 『女学雑誌』の想定していた女性読者像

輪手 千夏

明治時代は近代化が始まった時期であり、文明開化や近代思想が広がるとともに教育制度の確立が行われ、しだいに女性のリテラシが高まった。そうしたなかで明治 18 (1885) 年、近藤賢三 (不詳 - 1886) と巖本善治 (1863 - 1942) によって『女学雑誌』が創刊される。日本最初の女性雑誌とされる『女学新誌』に次ぐ女性雑誌に位置づけられ、『女学雑誌』は、編集方針や形態などを変化させながら、明治 37 (1904) 年までの約 20 年にわたって、526 号、計 548 冊が発行された。掲載された記事は、女学、女子教育論、良妻賢母思想、廃娼論、文藝批評、小説論、文学作品など多様であり、その執筆者には、島崎藤村、北村透谷、星野天知、木村熊二などがいた。

このような『女学雑誌』に関する先行研究には、掲載されていた論考や文学作品に注目してそれらの文学史的意義を考察したものや、『女学雑誌』やその記事内容を女性史や女性学の観点からとらえたものが多く、『女学雑誌』の読者像について分析する研究は管見の限りなかった。

そこで本研究では『女学雑誌』の想定した女性読者像を明らかにすることを試みた。分析方法としては、『女学雑誌』に掲載された記事に注目し、『女学雑誌』に収録されている記事の中から、記事タイトルに女性を表す言葉を含む記事を抽出し、その記事内容から想定される読者像を明らかにすることを試みた。なお、本研究で用いた『女学雑誌』は臨川書店から 1984 年に刊行された復刻版である。

分析においては、『女学雑誌』掲載記事のうち、タイトルに女性をあらわす言葉を含む記事 7,266 件を抽出できた。なかでも「婦人」と「女子」を記事タイトルに含む記事が圧倒的に多かった。「婦人」という言葉をタイトルに含む記事には、とくに婦人の集会に関する記事が多く、『女学雑誌』の考える「女学」普及の中心として、「婦人会」の存在に大きな期待が寄せられていたことが分かる。また、「女子」という言葉をタイトルに含む記事には、女子教育に携わる学校の生徒募集案内といった学校に関する記事や女子の集会に関する記事が多数みられた。

これら抽出された記事内容から考えられる、『女学雑誌』の想定していた女性読者は、おもに (1) 中流階級以上の女性であり、地位向上や自立を目指す集会に参加している、もしくは参加しようとしている女性、また、(2) 巖本が校長を務めた明治女学校の生徒を含む女学生であったことが分かった。『女学雑誌』がこうした女性や女学生のこころを掴もうと試み、雑誌の読者として取り込もうとしていたことが明らかになった。

(指導教員 原 淳之)